

2020年12月9日(水)第2水曜祈祷会

ホセア書5:1~15

「わたしの顔を慕い求めるまで」

■神を知ることがなければ(4:1~19)

- ・「イスラエルの子らよ、…神を知ることもないからだ」 → イスラエルの滅亡は無知の故だった
- ・「祭司と口論…預言者も…つまずく」 → 民の罪に関して祭司や預言者らの責任は大きい
- ・「彼らは増えるにしたがって…」 → 人数が増えればそれだけ偶像礼拝も蔓延していった
- ・「悟ることのない民は滅びに落ちる」 → 祭司の墮落の結果、悔い改めない民全体が滅びる

1. 主を裏切り続ける民(5:1~7)

- ・「祭司たち…イスラエルの家…王の家」 → 三つの支配者階級。指導者たちへの宣告。
- ・「…聞け…心せよ…耳を傾けよ」 → 神はくりかえし警告されるが、民は悔い改めようとしなない。
- ・「わたしは…よく知っている」 → 神は民の状態をよく知っている。何も隠し通すことはできない。
- ・「彼らが主を知らないからだ」 → 形だけの偶像礼拝をささげても、主を見つけることはできない。
- ・「主が彼らから離れ去ったのだ」 → 偶像礼拝を行う民から、主は離れ去って行かれる。
- ・「彼らは主を裏切り…」 → バアル化した礼拝をささげること。「新月の祭り」もバアル化している

2. ユダとイスラエルの争い(5:8~15)

- ・「角笛を…ラッパを吹き鳴らせ…ときの声…」 → 神の裁きは「戦争」という形で表される。
- ・「わたしは彼らの上に激しい怒りを水のように注ぐ」 → 契約を破る民に、主の怒りがくだる。
- ・「人の決め事に従って歩んだから」 → 神以外ものにより頼んでしまった結果(打ち砕かれる)。
- ・「わたしが引き裂いて歩き…」 → 両国ともあたかも獅子が獲物を裂くように主が滅ぼされる。
- ・「わたしは自分のところに帰っていよう」 → 天の御住まいに帰られる(ミカ1:3、詩篇104:29)。
- ・「わたしの顔を慕い求めるまで」 → 真の悔い改めとは、主の御顔を慕い求めること
- ・「苦しみながら、わたしを慕い求める」 → 主の懲らしめは、民が罪に気づき、立ち帰るため。

◎まとめ:「わたしの顔を慕い求めるまで」について

- ・主はなぜ繰り返し警告を与えられるのか。
- ・形だけの礼拝とはどういうものか。
- ・主のさばき(懲らしめ)の目的は何か。

「主よ、どうか、あなたの御顔の光を、私たちの上に照らしてください。」

(詩篇4:6)

「神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」

(IIコリント7:10)